

6月のHUGだより

情報提供者：やましろ小児科 山城 武夫

今月のテーマ

アトピー性皮膚炎について

はじめに

アトピー性皮膚炎は乳幼児期から発症し、自然治癒も期待できるものから難渋する皮膚炎のものまでいろいろな段階のものがあります。乳児脂漏性などの乳児湿疹との区別のつき難いものがあります。また、食物アレルギーが関与するアトピー性皮膚炎もあり、治療上の混乱（過度な除去食などの取り扱いで栄養状態が悪化、二次的な成長障害、睡眠障害など）が見られます。

アトピー性皮膚炎とは

かゆみを伴う全身または部分的に発生する皮膚の病気です。よくなったり悪くなったりを繰り返すという特徴があります。アトピー性皮膚炎は、アレルギー性の体質や皮膚のバリア機能の低下など、さまざまな原因が組み合わさって起こります。診断には皮疹の部位や状態（軽い皮疹として、紅斑、乾燥、落屑、強い皮疹として紅斑、丘疹、びらん、浸潤、苔癬化）、掻痒感、持続期間などを考慮して診断します。また、抗原検索としての特異的IgE抗体価、好酸球、LDH、などがありますが、血清TARC値（アトピー性皮膚炎の重症度の評価に有用な血液検査）も検査指標として使われています。



治療としては

アトピー性皮膚炎の治療として、掻痒に対して眠気などの少ない第二世代の抗ヒスタミン作用を有する抗アレルギー剤、炎症を抑えるステロイド外用剤（いろいろな強さのものがあります）、クロリムス軟膏、等で皮膚炎の状態の改善を図ります。従来なら再び悪くなったら再度治療を開始する方法をとりましたが、アトピー性皮膚炎はしばしば再燃（悪くなること）することが多く、最近では急性期治療のあと皮膚の状態が良くなっても、少しは炎症が残っていますので、週に2回ほど炎症を抑えるステロイド外用薬などを定期的に使用して、炎症を抑え、薬の副作用をできるだけ少なくし、急性悪化を防ぎます（プロアクティブ療法と言います）。また、皮膚バリア機能の改善に保湿剤の使用がよいでしょう。スキンケアには入浴も必要です



が、石鹸は非刺激性、無香料のものでよく泡立てて優しく、お世話する人の手で洗いましょう。そして、入浴後は皮膚の乾燥を避けるために素早く保湿剤を塗りスキンケアをしましょう。

おわりに

アトピー性皮膚炎は見た目では治まった皮膚の炎症も再燃し易いので、部位、部位での軟膏選択、塗り方、入浴の方法などを、かかりつけ医、専門医、スキンケア指導看護師等に指導してもらいましょう。

そして QOL を高めましょう。



※本文下線部の注釈です

紅斑（こうはん）：皮膚の盛り上がりはないが赤くなること

落屑（らくせつ）：皮膚の角質がふけのように剥がれる

丘疹（きゅうしん）：ぷつぷつと皮膚が赤く盛り上がる皮疹

びらん：赤くただれる

浸潤（しんじゅん）：ジュークジュークした状態

苔癬化（たいせんか）：皮膚炎が慢性化して厚くなる

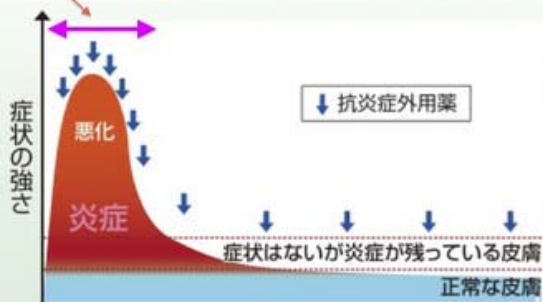
掻痒感（そうようかん）：かゆみ

QOL： Quality of Life＝生活の質

プロアクティブ療法とリアクティブ療法の違い

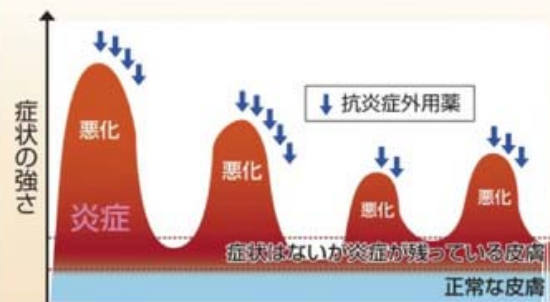
最も重要なところ

プロアクティブ療法



プロアクティブ療法は、急性期治療後の皮疹が消えつつある部位でも炎症が残っていると考え、週2回程度の抗炎症外用薬（ステロイド外用薬など）を定期的に外用することで「より小さな炎症のうちにより少ない抗炎症外用薬で」治し、急性悪化を防ぎ、長期間無症状の状態を維持することを狙った方法。

リアクティブ療法



リアクティブ療法は、皮疹が悪化した時に抗炎症外用薬によってある程度皮疹が改善した後、保湿剤によるスキンケアに切り替え、炎症が再燃した際に抗炎症外用薬に切り替える従来からの治療法。